

2017 年度
非文字資料研究センター・主催：「近代沖縄における祭祀再編と神社」共同研究班
第 2 回公開研究会

「琉球・沖縄の御嶽と神社」

日 時：2017 年 7 月 21 日（金） 14：40～18：30

場 所：神奈川大学横浜キャンパス 23 号館 203 号室

プログラム

総合司会：津田良樹（非文字資料研究センター客員研究員）

挨拶ほか 挨拶：中島三千男（非文字資料研究センター客員研究員）

趣旨説明：後田多敦（非文字資料研究センター研究員）

報 告 ①基調報告 1：「沖縄のウタキの構造—その展開を探る」
波照間永吉（沖縄県立芸術大学名誉教授）

②基調報告 2：「琉球・沖縄の神社—その遡源と変遷」
加治順人（沖縄県護国神社宮司）

③補足報告：『琉球処分』とその後の琉球祭祀の再編
後田多敦（非文字資料研究センター研究員）

質疑応答・討議

報告

後田多敦

（非文字資料研究センター研究員）

「琉球・沖縄の御嶽と神社」をテーマにした神奈川大学非文字資料研究センター第 2 回公開研究会が 2017 年 7 月 21 日（金）、神奈川大学横浜キャンパスで開催された。これまで、共通の場で議論を行うことがほとんどなかった琉球の伝統的祭祀と沖縄の神社の双方の研究者が報告したこともあり、平日の開催にもかかわらず 80 人余の参加者が会場に詰め掛けた。

この公開研究会は 2017 年度からスタートした「近代沖縄における祭祀再編と神社」共同研究班のキックオフ研究会として開催された。同班は「海外神社跡地のその後」共同研究班の成果を引き継いで発足したもので、近代日本の海外神社の在り方や位置づけなどを考える上でも、近代沖縄における祭祀や宗教政策を踏まえる必要があるとの理解から、沖縄の御嶽、神社や宗教政策についての研究を始めている。

近代以前では琉球国として日本社会とは異なった歴史を歩んでいた沖縄は、近代以降の日本社会でも特異な位置にあった。そのため、沖縄の宗教政策を理解するには、前近代の琉球の祭祀や祭祀空間としての御嶽と神社、近

代における伝統的祭祀と神社の再編と創建などを対比させることが不可欠である。しかし、琉球の伝統的祭祀の研究者と神社の研究者が、共通の場で議論をすることはほとんどなかった。本研究会では御嶽と神社のそれぞれの現地沖縄の研究に学び、課題や論点を共有化し新たな研究視点やアプローチ、現状をさぐることを目指して開かれた。



中島三千男氏

公開研究会では初めに、中島三千男客員研究員からセンターの活動などの説明がなされた後、津田良樹客員研究員の総合司会で、波照間永吉沖縄県立芸術大学名誉教授と加治順人沖縄県護国神社宮司がそれぞれ報告した。さらに、筆者が補足の報告を行った。その後、会場からも質問や話題提供を受けながら議論を深めた。

波照間氏と加治氏の報告は 2018 年度発行予定の



津田良樹氏

『非文字資料研究』16号で、報告をベースにした詳細な論考を本人がそれぞれ執筆する予定なので、ここでは簡単な概要紹介に留めておきたい。

*

最初に琉球・沖縄の伝統的な

祭祀の研究から、波照間永吉沖縄県立芸術大学名誉教授が「沖縄のウタキの構造—その展開を探る」と題し、沖縄の信仰で中心的な役割を果たす御嶽について、歴史をたどる形で基礎から核心部分、そして現状まで具体的に報告した。

波照間氏は琉球の祭祀や歌謡の研究者で、祭祀歌謡などの著書を持つだけでなく、琉球国の王府が歌謡を集めて16～17世紀にかけて編さんした「おもろさうし」の校訂本『定本 おもろさうし』（角川書店、2002年）や前近代における琉球の祭祀を知る上で基礎的な資料である「琉球国由来記」（1713年編さん。王府が全国の御嶽の由来や祭祀などを調査して記録した）を校定し『定本 琉球国由来記』（角川書店、1997年）を刊行するなど、テキストの整理などの基礎的研究も続けている。報告は伝統的な祭祀空間である御嶽について、近代における祭祀再編を考えるために不可欠な前提知識を提供しながら、文献研究や自身の御嶽調査なども踏まえて基礎的な点から現状までを報告した。

波照間氏は、まず琉球の創成と御嶽が強く結びついていることを紹介。歴史書『中山世鑑』（1650年）に登場する琉球の始まりに御嶽が作られたとする「阿摩美久、土石草木ヲ持下り、島ノ数ヲバ作りテケリ。先ヅ一番ニ、国頭ニ、辺土ノ安須森、次ニ今鬼神ノ、カナヒヤブ、次ニ、知念森、斎場嶽、藪薩ノ浦原、次ニ玉城アマツヰ、次ニ久高コバウ森、次ニ首里森、真玉森、次ニ島々国々ノ、嶽々森森ヲバ、作テケリ」との部分を紹介しながら、琉球と御嶽との関係を説明した。また、王府が編さんした「おもろさうし」から、御嶽やその神が琉球の王権とも深く結びついていることを解説した。

「琉球国由来記」に記録された御嶽は全体で902であ

ることを紹介した上で、現在の御嶽を網羅的に把握した調査はなく、現在の御嶽の正確な実数は分からないが、宮古・八重山地区では御嶽と呼ばれるものの数は1990年代の調査では増えていると指摘。さ



波照間永吉氏

らに、御嶽の構造や祭祀との関係については、自身の調査をもとにスライドで紹介した。

現代の御嶽については、信仰の形骸化と変化が起きているとして、那覇市小祿地区での複数の御嶽が一つに統合された事例や八重山地区で御嶽そのものが破壊されてしまった事例などを紹介した。現状報告では、生活者としての実感なども含めて、現在の御嶽の変化など自身の生活体験も話題としながら具体的に語った。

沖縄の神社については、加治順人沖縄県護国神社宮司が「琉球・沖縄の神社—その遡源と変遷」と題し報告。加治氏は沖縄県護国神社宮司を務める一方で、沖縄の神社の数少ない研究者として『沖縄の神社』（ひるぎ社、2000年）の著書もある。

加治氏は、琉球には14世紀～16世紀に熊野地方からの僧侶（補陀落渡海僧）や本土の貿易商人により、神社信仰が伝わったとした。そして、尚泰久王（1454～1460年）から尚真王（1477～1526年）の時代に王府によって神社と寺院が建立され、やがて真言宗系神社が琉球八社（官社）として、王府から営繕費と役俸を支給されるようになったと琉球国時代の神社について説明した。

また、近代以降の神社や社会環境については、①戦前期、②戦後の混乱と復興期、③現代の神社—と時期区分しながら分析した。戦前期には明治政府による1890（明治23）年の改革で、琉球八社の一つだった波上宮が官幣小社に列格される一方で、他の神社は無格社として荒廃したほか、神仏分離によって神社内の仏像が撤去されるなどしたという。さらに、この時期の改革で、前近代から存在した神社の本土化が始まったと指摘した。1910（明治43）年の改革では神職組織が改革され、大夫、内侍、祝部から社司、社掌への変更があったほか、



加治順人氏



後田多敦（筆者）

琉球の伝統的なノロが廃止され、拝所（御嶽）の管理者とされた。

大正・昭和初期に沖縄と所縁のある人物を祭神とする宮古神社、沖縄神社、護国神社、世持神社が設立されたほか、1943（昭和18）年には「沖縄県社創立計画案」が出され、さらに一村一社運動による御嶽の神社化は、戦局が悪化したことでとん挫したと説明した。

そして、沖縄の神社は沖縄戦

でほとんどが焼失し、戦後の混乱の中で荒廃して復興した神社と復興できなかった神社に二分化することになったという。現代の沖縄の神社は本土の神社組織との関係強化が進み、祈願・参詣者が増加し、皇室への窓口や保守層の拠り所としての役割も果たしていると分析した。さらに、民間信仰の対象となり、御嶽信仰との融合も見られるという。加治氏の報告では沖縄戦で被災した後の神社の様子をとらえた貴重な写真などもスライドで紹介していた。

波照間氏と加治氏の報告を受け、筆者が、「『琉球処分』とその後の琉球祭祀の再編」として報告。「琉球処分」と呼ばれる19世紀末の明治政府による琉球国併合という社会変化と、祭祀の変化を、明治政府に接収された琉球国の王城だった首里城を事例に説明した。

琉球国では「火ぬ神」や御嶽という祭祀対象や祭祀空間を用いて、国王や国家の安泰などを祈願する独自の国家祭祀が存在していた。首里城は王の居城であるだけでなく祭祀空間をも持ち、城内には「おせんみこちゃ」と呼ばれる琉球国の「火ぬ神」と10の御嶽が存在した。これらは琉球独自の祭祀対象であり、首里城接収で、

「おせんみこちゃ」は中城御殿（世子屋敷）へ移され、10の御嶽での祭祀はできなくなった。「琉球処分」は琉球の祭祀の再編の始まりだったと説明した。

沖縄県設置後の明治政府は「旧慣温存政策」をとったと理解されるがそれは適切ではなく、詳しく見ると旧琉球国の統治制度に対し①「廃止・解体」、②「温存あるいは改編しながら維持、段階的に廃止・解体」、③「新設」という対応を行い、国家祭祀制度についても、同様の政策を採用したと指摘。①「廃止・解体」の事例として、首里城内では10の御嶽の事実上の閉鎖、儒教施設の私化、②「温存あるいは改編しながら維持、段階的には廃止・解体」の事例として、地方の御嶽やノロ殿内（ノロクモイ）と呼ばれる女性神官の屋敷・祭祀空間の温存あるいは改編、また琉球八社（日本系神社）の波上宮の官幣小社への列格、③「新設」の事例として、近代以降になって新設された沖縄神社、沖縄護国神社、世持神社一などを紹介した。

さらに、「改編」「読み替え」という方法もとられたとして、琉球国最高神官の屋敷だった間得大君御殿を官幣社に列格しようとした尾崎小良の提案や、御嶽の神社化を提案した河村只雄や鳥越憲三郎の動きなども取り上げ、説明した。

3者の報告の後、会場からは「御嶽の神様はどのように後世に伝えているのか」「沖縄本島と宮古・八重山の御嶽の違いについて」「御嶽と本土の自然を祭る信仰との関連」「伝統祭祀の継承具合はどうか」など、祭祀の内容や継承や現状についての質問が出され、議論がなされた。琉球八社の一つ普天満宮の新垣義夫宮司が沖縄から参加し、普天満宮について説明を行った。

*

参加者の感想を幾つか要約して紹介する。

①沖縄のウタキに関心があり、以前巡った時、ウタキに鳥居があった。なぜ鳥居があったのか不思議だった。神社化しようとしたことを知らなかったので、聴講したくて参加した。沖縄の文化には神職と異なる職責があり、また性別も違う。琉球文化が先の文化と思えるが力の強いところが統治していく。今後もっと知りたいと思った。

②神社神道の対外的側面、とくに琉球における祭祀の神社神道との関係性に関心がありました。

③沖縄に関する本は沢山ありますが、今回のテーマの「ウタキ」はこの研究会に参加して初めて知りました。

④沖縄にとっての「御嶽」と「神社」がどのような存在だったのか知りたかったので大変勉強になりました。



平日にもかかわらず大勢の人が駆けつけた

写真を見せていただき、より一層イメージが湧きました。

⑤沖縄における神社の存在を考えたことがありませんでしたが、近代日本の精算が終わっていない象徴という視点は重要だと思いました。

⑥沖縄宗教について今回の発表で沖縄の宗教形態や日本本土と沖縄との宗教関係を知ることができました。さらに琉球処分から今日に至る変遷から、問題点など日本と沖縄の関係を知る上で参考になりました。

⑦沖縄の神社と御嶽との関係、とりわけ御嶽の神社化への動きなど大変興味深かったです。なぜ御嶽に鳥居があるのかは疑問でしたが、その経緯も分かりました。

⑧「琉球処分」の「処分」の意味を私（たち）は知らなすぎます。そのことを恥じ入るばかりです。ウタキと神社、首里城の果たした役割など、他では聞くことのできない貴重なご報告に感謝いたします。

⑨今までの日本帝国の神社制度とは全く違って、あらためて考えることが増えました。とても面白いです。

⑩中国文化の研究との関わりで関心を持っています。沖縄の文化の歴史的な多重、多層性を理解する上でも、大変興味深いテーマであったと思います。

⑪御嶽と神社の相互関係がもっと深められる議論になると良かったと思うが、まだまだ明らかにされていない課題があることが分かり、一筋縄ではいかないのだという感想を持ちました。

*

波照間氏、加治氏の報告・問題提起や会場からの質問・話題提供などを受け、個人的に確認できた近代現代沖縄の祭祀やその政策について考える上で必要なことの幾つかをまとめながら提示しておきたい。

第一に、基本的なことだが時期区分が重要だということ

とを再確認した。1609年の島津侵略を一つとし、以下の画期への自覚が必要だろう。

○「琉球処分」（1872～1879年）

明治日本による「琉球処分」（琉球国併合過程）は、祭祀にとっても大きな画期。「琉球処分」前後で祭祀の持っている位置づけや意味が根本的に転換する。

○沖縄戦（1945年）と占領（1945～1972年）

沖縄戦での被災のダメージとその後の占領期という問題である。沖縄戦によるダメージは人的な被害や祭祀空間の物理的な破壊だけでなく、社会的基盤の破壊などを総合的にとらえる必要がある。さらには米国占領期という「日本本土」社会との間で生じる前提の差異の存在である。

○沖縄の「日本復帰」後（1972年～）

「日本復帰」後は、その前の占領期を踏まえて、沖縄社会の変化を考える必要がある。

これらの大きな画期を踏まえて、加治氏が区分したようにさらにその期間における政策や動きなどで時期区分していく必要があるだろう。

第二に、用語の問題。同じ「神社」と名づけられているが、琉球国時代からの「琉球八社」と明治以降に創建された神社とを区別する必要がある。両者とも「日本系神社」であるが、違いは位置づけや背景の違いだけに留まらない。「近代沖縄における祭祀再編と神社」への関心でいえば、近代以降に創建された神社（例えば、沖縄神社、護国神社、世持神社など）が、「海外神社」の系譜に位置づけられるだろう。

第三に、祭祀空間や祭祀対象の再編改編問題では、御嶽や神社（前近代以前だけでなく、時期によっては近代に創建された神社も含めて）双方からアプローチすることが必要だ。御嶽の「日本化」だけでなく、神社の「沖縄化」も見られる。

簡単な整理だが、研究会での議論を通して、近代以降における御嶽の神社化や御嶽の祭神の改編の動きや琉球八社などの再編と、日本の「海外神社」の問題と関連していることの輪郭が見えてきたとあっていいだろう。近代沖縄の宗教政策を理解するためには、伝統的な御嶽などの信仰と、琉球八社と近代に創建された神社を含めた双方から政策と実態を含めてアプローチする必要性を確認できた。日本での沖縄の位置を台湾や朝鮮などの旧植民地や旧占領地などとの対比でとらえ、沖縄を通して「海外神社」や沖縄の「日本化」とは何かを考えることで、日本がしてきた植民地・占領地支配の意味を浮かび上がらせることになるように思う。